

## 【書評】

上羽陽子・金谷美和編

『躍動するインド世界の布』

昭和堂、2021年刊  
132頁、1900円＋税

国際ファッション専門職大学  
丹羽朋子

インドの女性たちが身に纏う煌びやかな民族衣装サリー、男性の頭に巻かれたターバン、日本にも蒐集家の多い古渡の更紗こわたりのさらさの布……。日本に住む多くの人々にとって、マスメディアやアパレルショップのディスプレイなどを通じ、インド製の精緻な衣装や布を目にする機会は少なくない。しかしその作られ方、使われ方、ましてやそれらがインド内外でどのような社会的連関を生み出す媒体となるかに至っては、具体的なイメージをもてる人は少ないのではないかと。上羽陽子・金谷美和編『躍動するインド世界の布』（昭和堂、2021年）は、そのような筆者も含む一般読者に向けて、同地の人や神像、街を彩る多種多様な「布」を切り口に、複雑な社会構造や宗教文化、さまざまな現代的世相がもつれあう「インド世界」についての理解を促す良書である。

小判ながら本書には、25に及ぶ布や衣装が登場する。その一つひとつに言及するのは紙幅からも難しいため、本稿では全体概要について見たのち、評者が注目した(1)編集方法、(2)布の物性・物質性に関する考察部分の2点に絞って紹介したい。

「インド世界の布は場を区切り、人をつなぎ、神と人の媒介となり、政治を動かし、グローバル経済を生み出す」（本書、3ページ）。編者の上羽陽子が「はじめに——躍動する布」で示すこの一文に、本書の骨子は集約される。全体構成はこの言に沿うように、第1部から第4部までインドの布の役割が4つの大きなテーマに据えられ、各部にはそれぞ

れ4～6のトピックと社会構造や宗教などの背景知識を補うコラムが配されている。各トピックで、一人の執筆者が種類の布を取り上げて解説する形式である。以下に本書の目次を示す（カッコ内は執筆者）。

はじめに——躍動する布（上羽陽子）

第1部 場をくぎり、人をつなぐ布

吉を招き入れる——戸口飾りトーラン  
（福内千絵）

絞り染めの婚礼衣装——花嫁に贈る布  
（金谷美和）

関係を更新する——ラージャスターンの  
ターバン（三尾稔）

輪廻転生する布——古着のフローがむす  
ぶ世界（岩谷彩子）

空間を一変させる「布建築」——バンク  
ラデシュのトロン（五十嵐理奈）

男性と女性の領域——イスラームの  
ヴェール（金谷美和）

コラム 着るだけではない布——一枚布  
の多様な使途（金谷美和）

コラム カーストとは何か（田辺明生）

第2部 神にとどく布

聖と俗——染色布で女神寺院をつくる  
（上羽陽子）

神と出会うために——礼拝儀礼布ピチュ  
ワイー（豊山亜希）

神に捧げるキラキラ布——石版画の絵姿  
をめぐって（福内千絵）

女神の霊力——奉納されるシルク・サ  
リー（杉本星子）

墓廟にかぶせる布——ダルガー・チャー  
ダル（鈴木英明）

願いをたなびかせる——ブータンの祈り  
の旗（宮本万里）

コラム 色からみたインド世界（岩谷彩  
子）

コラム 交錯する宗教文化（三尾稔）

第3部 政治をうごかす布

民族独立運動をつなげる——手紡ぎ手織  
り布カーディー（豊山亜希）

- モーディー首相、サリーになる (杉本星子)
- 国民形成の象徴——インド独立にみる国旗 (豊山亜希)
- 政治とスローガン——バンングラデシュの横断幕 (五十嵐理奈)
- ナショナリズムの表象——ネパールの織布ダカ (高道由子)
- ナラティブ・テキスタイル——刺繍であらわす被災経験の語り (金谷美和)
- コラム イギリスのインド植民地支配 (杉本星子)
- 第4部 布がうみだすグローバル経済
- 世界を魅了したファッション・アイテム——バンダナの誕生 (金谷美和)
- アフリカを彩るインド産プリント布カンガ (鈴木英明)
- 変容する舞踊衣装——擬態するカールベリヤー (岩谷彩子)
- インドの古典から世界の古典へ——バラタナーティアムの衣装 (杉本星子)
- 意匠転用——布から陶器へ (豊山亜希)
- 産業革命のひきがね——色落ちしない多色染めへの憧憬 (上羽陽子)
- 東西交易による技術移転——パールシー商人と刺繍サリー (杉本星子)
- フェアトレードの先駆け——ノクシ・カント (五十嵐理奈)
- コラム 素材の宝箱 (上羽陽子)
- インド世界を読み解く ブックガイド
- おわりに——布からインド社会をみる (金谷美和)

まずは各部の概要を見ていこう。第1部では、「時間や空間を一定のルールのもとに区切り、つなぐことで世界を秩序づける布」、具体的には通過儀礼や結婚式・葬式などでまとわれ、聖と俗、あるいは宗教・民族・カースト・男／女などの社会集団の境界を区切り、互いの領域を侵さないようにつなぐ「布」の役割に焦点が当てられる。いわゆる伝統的な

織布以外にも、後述する市場主義経済化に伴う大量生産・消費の時代を迎え流通が活発化した「古着」のような、従来とは別の仕方では異なるコミュニティ間をつなぐ布も扱われていて興味深い。

つづく第2部では、「宗教や日々の祈りの場における布の機能や役割」として、神々への供物となるサリーや旗、そのアイコン画が魔除けや護符となる布などが、多彩な宗教文化の背景とともに紹介される。

第3部では転じて、近代以降、より広い範囲の人々に象徴や意味を伝えるメディアとして用いられるようになった「布」が扱われる。「政治をうごかす布」として論じられるのは、インド独立運動の中でガンディーが先導したスワデーシー (国産品愛用) 運動で知られる手紡ぎ・手織りの綿布カーディーや、ネパールのナショナリズムの象徴として着用される幾何学模様の織布ダカ、2001年のインド西部地震後にグジャラート州で作られるようになった被災経験を「語る」刺繍が施されたナラティブ・テキスタイルなどである。

第4部では「インド世界」の外にも視野を広げ、多国間交易を通じてインドから世界各地に流通していった布が取り上げられる。卓越した木綿の捺染技術からヨーロッパの人々の憧れとなり産業革命の引き金となったと言われるインド更紗や、アメリカのバンダナのルーツとされるインドの絞り染め布、実はインドで生産されてきたというアフリカのプリント布カンガ、インド古典舞踊の世界展開に伴う衣装の変化についてなど、17世紀の大航海時代から現代に至るまで、グローバルな流通によって各種の布が素材やデザインとともにその機能や社会的な役割を変容させてきた過程が描かれる。

編者の金谷美和によれば、本書は南アジア地域研究国立民族学博物館拠点の「布班」の共同研究会をきっかけに編まれたという。12名の寄稿者の専門は人類学・染織・歴史学など複数分野に跨るが、金谷があえて「専

専門的な内容の水準を落とさずに、一般の方にも読みやすい文章にするために（……）修正をさせていただいた」と断りを入れているように、それぞれのトピックの内容からテキストの語り口、レイアウトに至るまで、確固とした編集方針が貫かれていることが見て取れる。

第一に評者が秀逸だと感じたのは、その目次構成である。ある特定の限られた空間を仕切る「布」から始まり、人／神の関係性、より多くの人々を巻き込む政治的なメディア、グローバルな流通へとつながる各部を順に読み進めていくと、各トピックで取り上げられる「布」は、それ以前のパートで論じられてきた布の機能や役割を部分的に引き継ぎつつ、ページを重ねるごとに取り巻く人々やコミュニティの数が増えて関係性も輻輳し、布が区切りつなぎ合わせる時空間もまた広がりを見せる。音楽に例えれば旋律を奏でる声や楽器が徐々に増え音像が多重化していくラヴェルの「ボレロ」のように、読者は一冊の本の中で、一枚の布が社会の中でもちうる役割や可能性に関するイメージが多元化し、立体化していくプロセスを味わうことができる。

この構成は、本書が国立民族学博物館で開催された企画展「躍動するインド世界の布」（2021年10月2日～2022年1月25日）と連動して出版され、同展の図録的な役割をもつこととも関係するのではないか。実際の展示では本書に登場する布が実物資料として見られたのはもちろんのこと、その「展示語り」（展示の順路に沿ったストーリーの流れ）——1枚の布が人と人・空間を区切りながらつなぎ、ひいては布自体が時空間を動いて世界の異なる地域をつなぐまでに役割を広げていく——をも含めて、書籍と同様の構成がとられたと聞く。この展覧会と相互補完的な関係にあったことは、本書を考えるうえで極めて重要な点だと思われる。

編集方法として第二に目を引いたのは、モ

ノクロとカラーのページ割りの妙である。本書の各トピックには3-4ページが割り振られ、そのうち前半がモノクロ、後半がカラーページとなっている。あくまでも一読者の感想となるが、評者は前半部のテキストを読みながら、布を取り巻く背景知識を得ると同時に、それがモノクロページであるがゆえに、そこに描かれた布、人と人、人と神などの関係の結節点となる「布」が、実際にどのような色やテクスチャをもつのか、想像を掻き立てられた。そしてページを繰ると、カラーページの中に大判の写真が配されており、答え合わせのように布それ自体のイメージが具体的に現れて、精緻な染織品の質感や美しい色・形を堪能することができる。本書の巧みな編集方法として、こうした各トピックページのレイアウトの工夫にも魅了された。

つぎに、「ものの人類学」に関心をもつ評者が興味を引かれた点として、布の物性（thingness of things）や物質性（materiality）に関する考察部分を挙げたい。金谷は本書のきっかけとなった共同研究会において、「布は趣味的に眺めるだけの対象ではなく、布を通して社会を分析することができる分析枠組みになるはずだ」（130ページ）という認識が共通されたと述べるが、文様や図像などの記号的意味のみならず、「布の普遍的な性質や働き」と強く結びついた人や社会の関係性を描き出すことに成功していることが、本書のユニークな点である。

たとえば布自体の性質や素材の機能については、インドの戸口飾り「トーラン」に関して、布が「垂れる」という性質をもって、縁起の良い植物であるマンゴーの葉に見立てられ、吉祥の願いが託されることが示される（12ページ）。またバングラデシュの政治運動で用いられる、布にスローガンが書かれた横断幕は、布という素材であるからこそ、紙より大きなサイズで作成でき、デモ行進でも破れにくく、風雨で飛ばされることもない上に折り畳めて持ち運びやすい点が強調される。執

筆した五十嵐理奈によれば、「布の可塑性と携帯性が、都市にゲリラ的に広がる『抗議の視覚空間』を可能にした」のである（79-81ページ）。

染織から加工までの工程の中で浮上する、布の物質性もまた注視される。たとえば更紗やカーディーンに関する論考では、木綿という素材が本来「染まりにくい」ことから、他国と比べ優れた染色技術を有したインドの布が優位性をもって海外交易の商品となり（112-115ページ）、ひいてはイギリスによる植民地経営やそこからの独立運動にまで影響を及ぼす過程が描き出される（70-72ページ）。またグジャラート州の女神儀礼用の染色布は、手作業の染め工程で版のズレや滲みが出て、布ごとに図像の女神の表情が異なって見えることから、それをまとして女神を憑依させ信託を告げる司祭者たちは「視線がしっかりとした女神」を探そうと念入りに布を選び抜くのだという（42-45ページ）。

他には、長く巻ける、あるいは切断したり加工したりできるという布の特性を焦点化した論考もある。たとえばインドのラージャスターン地域では、近親者の死後の喪明あけ儀礼において、親族や債権者が故人の後継者の頭に、ターバンが「山のように」幾重にも重ねて巻きつけられる。執筆者の三尾稔は、これを巻く者と巻かれる者が新たに社会関係を結び直すことを確かめる行為であるとし、「ずっしりと重そうなターバンは引き継ぐ地位の責任の重みを本人に身体感覚として悟らせるかのようだ」と考察する（19ページ）。

他方、古着の新たな流通過程を追う岩谷彩子が目を向けるのは、衣装に使われる布が切断や加工される工程である。インドでは元来、「人は交換するものの性質を帯びて形成される」「ものを通して浄不浄も伝染する」という価値観があり、古着は親戚間など親密な関係の間で共有・再利用されてきた。ところが1990年代以降、移動生活を行うヴァグリたちが、地方と都市の間、さらには海外へと従

来とは異なる経路で流通させるようになり、インドの古着は異なる階層や地域間を媒介するものへと変容を遂げる。その際、絹製の部分や刺繍装飾などの部分は切り離されて「エスニックでエシカルなファッション」としてリメイクされ、端布は土産物のクッションカバーやタペストリーに、外に見える素材として使えないボロの部分はクッションの中身やモップへと加工される。このようにして、布は切断・加工されて「輪廻転生」を繰り返す、フローの過程で「異なる部分を介して異なる人々をつなぐ」のである（22-25ページ）。断片化して重ねたりつなぎ直したりできるという布の物性は、元来はボロを4-5枚重ねて刺し子を施す自家用布であったバングラデシュの「カンタ」が、1970年代に開発援助 NGO の支援で同国の文化的アイデンティティを示す民俗芸術「ノクシ・カンタ」となり、海外への輸出品となる過程の中でも変奏されていく（120-123ページ）。

以上、評者が注目した本書の2つの特徴について述べたが、惜しむらくは若干わかりづらかった点にも触れておこう。本書では「インド世界」「現代インド社会」と地域を一括りにして論じられているが、各トピックで取り上げられる布には、国家としてのインド以外にもネパールやパキスタン、バングラデシュ、ブータンなど広範囲のものが含まれる。評者のような南アジア地域の地理や歴史に疎い者にとっては、そこにどのような文化的差異があるのか、ないのかが理解しづらかった。各部の最後には補論的に、各分野の専門家がカースト（38-39ページ）や宗教文化（66-67ページ）、イギリスのインド植民地支配（90-91ページ）などの背景知識を記したコラムが配されているものの、本書全体に散らばる各種の布との関係が読み取りづらい印象は否めない。ただし、本書の最終部には「インド世界を読みとくブックガイド」が用意され、門外漢に向けた配慮もなされている。より理解を深めたい読者は、そちらを合わせて参照

されたい。

本書は「類書のない、布を切り口としたインド社会論」(130ページ)という編者の「自負」に違わず、インドの布の入門書や従来のな展覧会図録の枠をはるかに超えた射程をもつ、非常に触発的な書である。布や染織研究のみならず、物質文化やものづくり技術などを対象とする文化人類学研究などの諸分野にとって、重要な参照点となると考えられる。

## 小島健輔著

### 『アパレルの終焉と再生』

朝日新書、2020年刊

232頁、790円+税

国際ファッション専門職大学

平野 大

本書は、近年苦境に立たされているアパレル業界がコロナ禍により更なるダメージを受けた状況を冷静に分析した一冊となっている。著者は、ファッション流通ストラテジストの小島健輔である。小島は、アパレル業界に対する豊富な知識と経験から、現状に強い危機感を持ち、本書で、感染収束後のアパレル業界のあるべき姿を問うている。

本書は、以下のように構成されている。

はじめに

プロローグ コロナで一変した生活と生計

第一章 壊滅的打撃を受けた百貨店とアパレル

第二章 百貨店はコロナ以前に終わっていた

第三章 コロナに直撃されたアパレル業界

第四章 こうしてアパレル業界は行き詰まった

第五章 コロナ後の新世界はエシカル&リサイクル

第六章 アフター・コロナの店舗販売は一変する

第七章 アパレルの販売員は使い捨てなのか

第八章 ギャンブルビジネスからスマートビジネスへ

エピローグ ファッションシステム幻想から顧客目線へ

あとがき

第一章では、新型コロナウイルス(以下コロナ)の影響で長期のロックダウンを余儀なくされたアメリカにおける百貨店とアパレルの破綻の事例、そして緊急事態宣言下の長期休業により大打撃を受けた日本の百貨店とアパレルの事例を取り上げている。第二章において、小島は百貨店の現状について「『百貨店は終わったのか』と問われれば、『終わったのではなく墮落して自滅した』と答えるしかないだろう」(本書、57ページ)と述べ、大変厳しい認識を示している。小島は、第三章では、コロナ禍によってアパレル業界が直面した危機について記し、続く第四章で、コロナ禍以前にアパレル業界が抱えていた構造的な問題点の存在について指摘している。第五章では、感染収束後のブランドビジネスについて、第六章においては、店舗販売はコロナによってどう変化するのかを予測している。第七章は、コロナ禍によって大きな打撃を受けたアパレル販売員の現状についての説明にあてられている。最後に、こうした危機的状況に直面したアパレル業界が取り得る施策について、第八章で提言を行っている。

本書のタイトル『アパレルの終焉と再生』の通り、内容自体もアパレル業界の終焉を強く意識させるものである。小島は本書の冒頭で「アパレル業界とファッションメディアが結託して消費を煽ってきた『ファッションシステム』も歴史的使命を終え、『ファッションの世紀』が終わる」(4ページ)と述べ、読者にアパレル業界の先行きの不透明さを強烈に印象付ける。

今回のパンデミックは、それまで不振にあえいでいたアパレル業界に痛烈な追い打ちを